



Title	地域における芸術文化の発展とネットワーク形成
Author(s)	細川, 美香; Mika HOSOKAWA
Citation	社会教育研究, 19, 85-96
Issue Date	2000-12-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28535
Type	departmental bulletin paper
File Information	19_P85-96.pdf



地域における芸術文化の発展とネットワーク形成

細川美香

1 はじめに

古くから、地域の住民同士は歌や踊りなどを楽しむことを通して、自分自身を表現・開放し、互いに絆を深め合ってきた。また多くの人が集まって表現に工夫を重ねていく中で、そのような活動において芸術性が高められていったはずである。自分や他人を理解し、非日常の空間を共有しながら一つのものを作り上げていく過程は、芸術文化独特のものであり、人間の生活の中でも欠かせない要素であると思われる。

しかし、現代の日本では、音楽などの芸術文化は商品として個人的に「消費」されるもの、技術を競い合うためのものとして見られがちである。そのような風潮は芸術の創造者と享受者の分断を生むことにもなり兼ねない。文化的な活動に対する行政や企業の財政的な支援も立ち後れている。個人的なレベルで文化活動をするとなると財政的な限界もあり、良い文化に触れられない人を生み出してしまうことにもなるのではないだろうか。大人から子どもまでが忙しく追い立てられて「ゆとり」を失い、地域のみならずその他の場面でも人間関係が希薄化している現在こそ、芸術文化が本来持っていたはずである力を再認識し、社会の中に広く役立てていくべきなのではないだろうか。

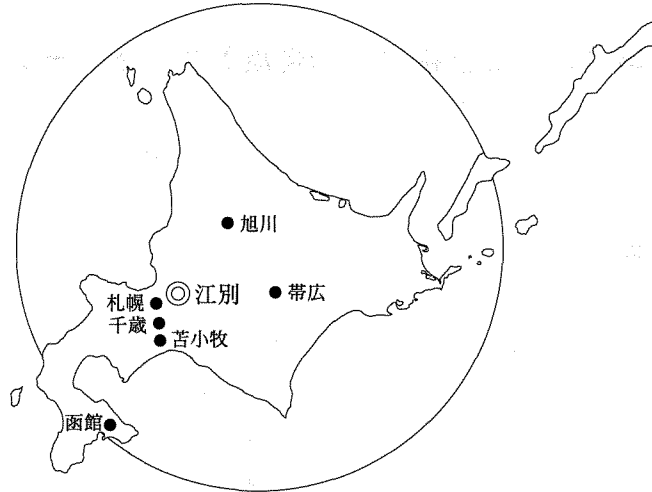
本研究では、北海道江別市の中学校・高校の吹奏楽部を中心とした団体間ネットワーク「江別音楽協会」を主な対象とする。平成11年7月～12月に行った聞き取り調査・アンケート調査をもとに、全体の展開過程及び指導者・生徒・地域住民の間につくられた関係と彼らの考え方の変化から、音楽活動の意義と可能性を探ることを課題とする。

[江別市の概要]

江別市は石狩平野の中央部に位置し、総面積は187.5 km²である。全般的に平坦な地勢で豊かな自然環境に恵まれ、札幌市、北広島市、岩見沢市、当別町、南幌町、新篠津村、北村と隣接している。市街地の北東部には水量豊かな石狩川が流れる。

昭和29年に北海道17番目の都市として市制が施行された。当時は農業人口26%で、都市の整備基盤は緒についたばかりであった。昭和30年代後期になると、札幌市の人口集中化の影響を受け、札幌の衛星都市化していった。

昭和40～50年代に入ると、文教台地区における大学、道立図書館、道立教育研究所その他の教育施設の立地、江別第一工業団地の整備などにより市の相貌が大きく変化し、札幌圏の中核都市とし



ての地歩を築いてきた。

2 江別音楽協会の活動の概要

平成2年以前の江別市では、音楽に取り組む人口は多かったが、それぞれが個別的な活動で横断的なつながりはなく、市民が自発的に江別市の文化全体を育てようとする試みもなかった。中学・高校の吹奏楽部も、多くの学校で活動は行っていたが、それぞれの学校同士が交流するということではなかった。コンクールの成績にとらわれているがために互いに敵対心を持っていたり、一人ないしは二人の顧問が全ての楽器を指導しなければならないので指導方法に悩む指導者もあり、このような状況の中演奏のレベルも全体的に停滞していた。

平成2年に市内の高校に転動してきた指導者N氏が、学校間の垣根を超えた交流・研修、市民に良い音楽を聞いてもらうための演奏会などの活動を通して江別の音楽文化を変える取り組みとして、中学・高校吹奏楽部のネットワーク化を呼びかけた。N氏は最初の赴任地で地域との交流を経験したことから、学校を発信地として地域に対して働きかける活動をしたと考えていた。市内の3高校6中学校（吹奏楽部のあるすべての中学・高校）がその呼び掛けに応えた。

平成3年、N氏と、同じく市内の高校の指導者H氏が中心となり、『江別市吹奏楽研究協議会(以下「江吹研」)』として活動を開始した。N氏が積極的に市教委と話し合いを行った結果、活動への賛同が得られ、社会教育課文化行政係から財政的な補助も受けられることになった。市民会館大ホールでの夏の音楽祭、外部から講師を招いての楽器講習会、アンサンブルコンテストなど、市内の吹奏楽部同士がともに音楽を学び、一つのステージを作り上げていく事業が行われた。これらの活動を毎年継続することによって、参加する吹奏楽部の演奏レベルは飛躍的に向上した。演奏会にも参

加者の家族を含め満席に近い観客が入るようになった。

[江別市吹奏楽研究協議会の活動の内容]

・アンサンブルコンテスト

各学校で編成したアンサンブル（3～8人の小さな編成による演奏であり、音楽活動全体の充実につながる）の発表をし、道内各地から招く講師が賞をつける。平成4年から毎年1回行っている。コンテストといっても競い合うことが主体ではなく、参加者が現状を理解し努力の糧にするためこの形式になった。事前にどう練習してきたか、後にはどのような課題が残っているかという内容で講師に提出するレポートを求め、事前・実施・事後のサイクルがで次につなげることが出来るようになった。

・楽器別講習会

市内の学校を会場として道内で実績のある講師を呼び、担当楽器ごとに10～15名程度のグループに分かれて講習を受ける。平成3年から毎年行っており、平成8年からは日本吹奏楽連盟の指揮法講習会の運営も行っている。楽器別講習会でもまた講師にレポートを提出し、事前・実施・事後のサイクルを大切にしている。通常学校のバンドは顧問1人または副顧問と2人で指導するため、全ての楽器の指導を充実させるのは大変難しい。この事業は指導者の不安を解消するのに役立った。また、楽器の技術だけでなく他の学校の生徒を見て刺激を受けたり、挨拶やマナーの向上にも役立つ。生徒たちの交流の場にもなる。

・演奏会

平成3年7月の「天の川シンフォニー」では、市内の学校バンドそれぞれの発表のほか市からの希望で江別の歌を演奏することになった。昭和53年に開基100周年記念事業として制作された「風はみどり」という歌で、「天の川シンフォニー」の中で教育長が指揮をとり、中学生・高校生の吹奏楽部と市内の合唱団による合同演奏が行われた。9月には、市が主催の事業としてそれまで各学校の個別の発表をしていた「親と子のふれあいコンサート」を継承し、中学生の選抜メンバーによる演奏と市内の合唱団との共演を試みた。この演奏会以後毎年2～3回ずつ様々な演奏会を行っている。市全体の吹奏楽部から集めた選抜メンバーで構成された一つのバンドで演奏したり、2～3校ごとの単位で合同バンドを作ったり、様々な形態が試みられた。

最初は戸惑いや反発を感じる指導者もいたが、会の中で学校間の交流を図ることにより、互いに演奏に関する相談をするなど指導者の間で人間同士としてのつながりができた。そして、徐々に江別市全体の音楽文化を育てようという意識が共有されていった。生徒たちも、他校の生徒をライブ

ルとしてではなく共に音楽を学び楽しむ仲間として見るようになった。また、会全体の活動だけでなく、各吹奏楽部が学校独自の演奏会や市民のイベントへの参加などを行い、周辺地域での小さな活動を通して、市民との交流を積極的に図ろうとするようになった。

また、指導者が市外の学校に転勤になってしまった場合も、そのまま活動を続けるために、転勤先の市外の学校を賛助団体として参加させられるようになっている。より多くのバンドが参加し、活動や交流の幅も広がっている。更に、江別で「地域の文化を創造する」ということに意義を見出した指導者が、転勤先の学校を巻き込んでその地域で活動を始めようとするケースも出ている。

一方、平成3年以降、市内の自主的な文化活動が全体的に活発化している。それまでは行政の行う行事に住民が出るという形が多かったのに対し、次第に住民が自主的に行う行事を行政がサポートするという形に移行し、文化活動による住民同士の交流が盛んに行われるようになった。行政側も江吹研とそれに参加する団体の活動が影響を及ぼしたと考え、一定の評価を与えている。

平成8年、発起人であるN氏が、江吹研の改革を提案した。提案の内容は主に、活動に対する指導者たちの意識を一層高めること、江吹研を巣立った卒業生の活動の場を作ること、学校の吹奏楽部同士でのつながりだけでなく市民全体との協同と広い音楽分野への拡大を図ることであった。指導者間で4回にわたる話し合いを持ち、平成9年に『江別音楽協会（以下「江音協」）』と名称を変更した。新しく打ち出された理念は以下の通りである。

【江別音楽協会の基本的な考え方と活動の内容】（会で作成した資料の要約 下線は筆者）

1. この街に、みんなの手で

音楽文化の歴史から教わることのひとつは、常に「伝承」と「創造」が表裏一体となり、「過程」と「評価」に多くの人間が関わっていることです。人材の存在だけで音楽文化は築けるものではありません。様々な団体や個々の連携が縦横にはかれ、多くの人の理解と支援を求めていく活動の継続が必要です。しかも人は歳をとります。音楽文化をどうとらえ、次代に何を残そうとしているかが問われています。音楽や文化は「情報」ではありません。多くの時間や物と共に「その場所」で「人間が動く」こと、その動きを次代を担う人たちがその場で見たり参加したりすることが大切なはずです。できあがったものを他の地域で見ただけでは「過程・創造・評価」の現場に立ち会い、参加すること・参加させることはできません。また、となりマチへの依存は、自分たちの手で文化の「伝承・創造・評価」を積み重ねていく力を失わせてしまうのではないのでしょうか。

2. 音楽を育てる畑づくりを

一つの団体や個人が抜き出ている地域音楽文化が高いとは言えません。より多くの人が「伝承・創造・評価」の過程に立ち会い全体の理解や支援の中から生まれた成果でなければ、正当な評価が地域に根ざさないばかりか継続性と発展性がないからです。『正当に評価してもらうこと』が次

の過程への第一歩として大切です。正当な評価のない所に文化は育たず、音楽文化は低迷することになるはずです。音楽文化を評価する「畑」を耕すのは皆の力なのだという視点を、この会としても大切にしていってほしいと考えます。そういう「畑」を耕す個々の努力と、それを支えていけるネットワーク作りも、文化振興には大切なことなのではないでしょうか。

3. それぞれの輝きが響き合いながら

日本人が海外で「あなたの国の音楽を聴かせて」といわれ、自分の国の音楽を演奏できないことにショックを受けて初めて本質的なことを考え始める例が多いようです。裏を返せば偏った音楽環境の中で偏った音楽文化を享受している現状があるのではないのでしょうか。今、私たちの周りにあふれている音楽のNo.1は西洋音楽だと思いますが、他に日本伝統音楽やその他数多くの音楽分野もあります。その各分野に身を置く人がそれぞれの窓から外を見ているわけです。そこで大切な点は、それぞれの小分野が独自性を本当に発揮しているかという点です。まず、特性の把握には他分野との比較が欠かせません。音楽のいろいろな分野が比較できるためには継続的な交流や研修と様々な融合の試みが必要なはずですし、互いの持つ要素の良さを取入れたりしながら各分野の特性を際立たせ、幅を広げていく工夫も必要です。音楽の各分野の独自性と融合性は、表裏一体の関係にあるといえるのではないかと思います。そして、そのことを踏まえたネットワーク作りが必要なのではないのでしょうか。

4. 垣根のない一歩を踏み出すために

音楽文化を支えていく重要な一つの標的は「次代を担う若者」です。特に中・高生に限ってみると「音楽に関わる部活動のほとんどが吹奏楽」という現状があります。しかし、部活動は正規の教育課程外の位置づけでもあり、社会教育的要素を持ったボランティア活動にも限りがあります。しかも、江吹研を巣立った若者たちの「受け皿」がありません。そういう層が江別では薄いままなのです。一方社会教育の分野でも、詳述しませんが若者たちの層の薄さなどほぼ共通の悩みを抱えているはず。学校教育と社会教育との間に壁があることもそういう状況を生む要因の一つでしょう。だからこそ「学社融合」という視点が重要視されてくるようになったのではないのでしょうか。次代を担う人を育てるのは地域全体です。様々な側面を持つ集団活動の在り方を模索する過程に生徒も一般市民も指導者も共に参加する融合型の機構が必要ではないのでしょうか。

・アンサンブルコンテスト

他の音楽分野との融合を視野に入れ、「重唱」「管・打楽器」「器楽・弦楽」「日本伝統音楽」「混成」の5部門を設置。吹奏楽以外の部門は吹奏楽部の生徒による重唱を行ったのみで、一般への拡大は今の所ない。2時間程度の一つの演奏会として成り立たせるため、当日の出場者は事前に実施した

「プレ・コンテスト」で推薦を受けたグループとする。鑑賞の機会もここで与えられたら良いと考えているが、予算の面で制約がある。

・楽器別講習会

アンサンブルコンテストと同じく他の分野との融合のため「楽器別講座」「合唱講座」「日本伝統音楽講座」「指導者講習会」を開講。平成11年までは、楽器別講座と指導者講習会が開催されている。また、楽器別講習会のほうでは吹奏楽部の中のリーダー層を対象とした講習会も行っている。講師を招き会場を借りるという都合上、参加状況や運営資金の関連から、対象者を限定していく方法などをとらざるを得なくなっている。

・シンフォニアスえべつ（基本方針を会の資料より要約）

「シンフォニアス」とは「響き合う」とか「調和のとれた」という意味の形容詞です。いろいろな人の音や、様々な音楽分野が集まっている姿の音楽集団を形容する言葉として選びました。この音楽集団は、各分野がそれぞれに独自性を追求していくことにその基本があり、各分野の融合が生み出す様々な可能性を追求する場として存在させようというものです。各分野それぞれに幅広い層が集まれば、いつでもどんな形や規模でも演奏できます。また、各音楽分野が大きな一つの集団に属していればどんな融合型でも演奏できますし、不足を補うことも可能です。目指す「シンフォニアスえべつ」は、その時々に応じた様々な「顔」を持った音楽集団なのです。そして、学校教育、社会教育という区分で活動するのではない「融合型」の生涯教育の場として位置づけ、音楽文化の「伝承・創造・評価」の積み重ねの過程に幅広い年齢層が楽しみながら共に立ち会い、学びあうことが可能な場にしたいのです。

学校の垣根を越えるという考え方の具体化として、中・高の卒業生を中心とした一般バンド『シンフォニアスえべつ』が誕生した。彼らは一つのバンドとして独自に活動するほか、協会全体の演奏にも参加し、生徒のリーダー・指導者と生徒の間の存在としても期待されている。また、それまで行っていた事業も、一般市民から参加者を募ったり、吹奏楽のほかに管弦楽・日本伝統音楽・合唱などの部門を設けるなど更に拡大していく方針を打ち出した。平成11年現在、市内の6中学校4高校、市外の3中学校が参加して活動している。ただ、学校以外からの参加は現在のところない。市内に音楽に取り組むサークルや団体は数多くあるが、それぞれに高齢化、方向性の違いなどの事情を抱えている。音楽協会が出来る前から文化協会もあり、発表会など年数回行っていたが、それにも参加していないサークルも多いといわれている。江音協の活動を理解してもらうために、主旨を示した文書を配布したり、具体的な活動を通して少しずつ参加を促すよう計画を進めている。指導者がそうであったように、いきなり足並みを揃えてやっていくのは無理だということは経験上わ

かっている。長い時間をかけてつながりを広げようとしている。

江音協に参加している学校の属する他の自治体やそうでない自治体でも、この活動に影響を受け学校関係の団体と市民団体が協同で文化活動を行おうという動きが出てきている。10年間に亘る活動の実績が外部からも評価され、認められてきている証拠であるといえるのではないだろうか。

3 江吹研・江音協の活動から生まれた協同

江吹研は、江別市内の中学校・高校の吹奏楽部が集まって出来たネットワークであった。一つ一つの吹奏楽部をみても指導者・生徒・周辺地域の関係があり、それらが複数集まることによって多面的なつながりが生じている。①代表者としての指導者同士の関係 ②生徒同士の仲間関係 ③バンドと学校周辺の地域とのつながりの3点に絞って考察したい。

① 指導者間の協同

江吹研発足が決まり、最初に集められたのは代表者である指導者である。N氏からの呼び掛けに対し、当時の市内の中学・高校吹奏楽部の指導者全員が賛同した。しかし、参加した指導者の中には「最初は地域全体のことなど考えていなかった」という人が多かった。「コンクールでの成績の悪さを何とかしたいと思っていた」「困っていることがあって、先生方のエネルギー・つながりでそれを解消し子どもに返せるといった、目先のことしか考えていなかった」と、それぞれに自分達の要求を満たせるといふ思いで参加している。中には「吹奏楽を初めて指導し、どのようにしたらいいかわからなかった」「自分の学校をどう伸ばすかということを考え、他校の先生方と話すこともなかった」という人もいる。市民との交流、市民に聴いてもらえる音楽という目標を最初から掲げていたN氏と、自分たちが困っていることを解決したいという他の指導者との間のギャップが少なからずあった。

活動が始まると、会の行事に参加したり、指導者同士がコミュニケーションをとる機会が増えた。互いに行き詰まっていること、悩んでいたことを相談しあううちに連帯感が生まれた。「自分は自分、他人の音楽を入れたくないという考えがあったが、殻を破ったときに他の人の音楽の良さがわかり、それを受け入れ自分の悪いところにも気づき、自分を磨ききっかけになった」というように、他人との交流をきっかけとして自分の音楽に対する認識を新たにしたりした人もいる。最初はバラバラだった指導者たちは当然考え方も多種多様であったが、他の人から影響を受けていく中でそれぞれのペースで学んでいった。発足後に新しく転入によって参加した指導者の中には「最初は不満、反発もあった。素晴らしいことをやっている」と冷静に考えられるようになったのは数年経ってから。時間が掛かって気心が知れた」という人もいる。会としてまとまって動く他に、2～3校ごとに個別的に交流する所も出てきた。生徒同士一緒に合奏をさせたり、指導者が他の学校に出向いて指導するとい

うこともあった。

江別音楽協会への転換がN氏から提案されたときには、指導者間で4回にわたる話し合いが持たれ、会のこれからのあり方について真剣に議論が交わされた。そして決定された理念は指導者全員によって賛同されている。

中学・高校の吹奏楽部を構成要因としているために、避けて通れないのが指導者の転勤である。「指導者の交代に伴い意志の疎通が足りなくなってきた」と指摘する指導者もいる。新しい指導者の中には「出来る限り一生懸命参加したいがこなすだけで精一杯」と、活動の頻度が多く目標が高いことを負担に思う人もいる。「大きい組織になってくると、新しい人の受入態勢を整えることも大切。入りやすい、入りたいと思う状況を作りたい」という指導者の言葉のように対策を考えていかなければならない。新しい指導者が主旨に賛同できず学校ごと脱退してしまうケースもあり、こうなると生徒が参加できるラインを絶たれてしまうことになる。市外の学校も賛助団体として参加できるようにしたのは、この問題を逆手に取ったアイデアといえるだろう。そのような指導者の中には自分たちの地域でも市民との活動を活発に行っており「江別で一緒に活動して勉強して刺激を受けたことを自分たちのまちに持ち帰り、皆に分けられる。自分はそういう役目だと思っている」と考える人もおり、他の地域の学校も巻き込んで活動に参加することで互いに与え合う影響は大きいとみられる。

② 生徒間・一般の参加者の協同

江吹研発足前の中学・高校の吹奏楽部は、バスの窓越しに野次を飛ばす、演奏会の会場で問題を

中学生・高校生の参加者に対するアンケート

商店街や神社での演奏に関するアンケート

(商店街・神社で演奏を行っている中学校1校に対して実施、有効回答数29)

	非常にそう思う		そう思う		どちらともいえない		あまりそう思わない		全くそう思わない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
a. 楽しい	16	55.2%	9	31.0%	1	3.4%	1	3.4%	2	6.9%
b. 演奏の機会が増えてうれしい	12	41.4%	8	27.6%	5	17.2%	3	10.3%	1	3.4%
c. 人に聴いてもらえるのがうれしい	14	48.3%	9	31.0%	4	13.8%	1	3.4%	1	3.4%
d. 演奏技術の向上に結びついている	12	41.4%	11	37.9%	4	13.8%	0	0.0%	2	6.9%
e. 地域との交流の機会になっている	15	51.7%	11	37.9%	3	10.3%	0	0.0%	0	0.0%
f. 地域の活性化に役立っている	10	34.5%	11	37.9%	6	20.7%	2	6.9%	0	0.0%
(有効回答数)	29									

大変だったからあまりよくなかった/演奏している側も聴いている側も楽しめていると思う/スペース的に狭く演奏しにくい/演奏は楽しいけれど自分たちの練習についていけない/聴いている人はもっとまじめに聴いて欲しい/もっと盛り上がったお祭りにしたい/行くかわりでもないけどきちとした場所があればいいと思う/もっとお祭りを増やしてくれば発表する場が多くなって良いと思う/大変だったけどやりがいがあると思った

江別音楽協会の活動にどのような意味があるか (中学生)

	人数	割合
a. 行事への取り組みで演奏技術が上がる	12	38.7%
b. 他校の生徒と交流できる	17	54.8%
c. 他校生を見て学べる	18	58.1%
d. 他校生との情報交換	3	9.7%
e. 高校生との交流	1	3.2%
f. 高校生を見て学べる	6	19.4%
g. 一般の参加者との交流	3	9.7%
h. 一般の参加者を見て学べる	0	0.0%
i. 活動が楽しい	7	22.6%
j. 自分自身が成長できる	18	58.1%
k. 学校同士が交流している	2	6.5%
l. 地域との交流ができる	3	9.7%
m. 江別全体で大きな活動ができる	0	0.0%
n. 江別の音楽のレベルが上がる	2	6.5%
o. その他	0	0.0%
(有効回答数)	31	

今後の江別音楽協会の活動に関する要望 (中学生)

	人数	割合
a. もっと行事を増やして欲しい	14	50.0%
b. 行事を減らして欲しい	4	14.3%
c. もっと他校生と交流したい	19	67.9%
d. もっと高校生と交流したい	11	39.3%
e. もっと一般の参加者と交流したい	6	21.4%
f. 吹奏楽以外の分野と一緒にやりたい	8	28.6%
g. 吹奏楽以外の分野に取り組んでみたい	3	10.7%
h. アンサンブルコンテストの改善	2	7.1%
i. 楽器別講習会の改善	4	14.3%
j. 演奏会の改善	1	3.6%
k. シンフォニアスえべつ改善	2	7.1%
l. その他	0	0.0%
(有効回答数)	28	

- h. 講評を具体的にしたい
 i. 2・3年の人も講習会に参加したい (2)
 パーカッションの先生が来て欲しい
 k. 練習の量を増やして欲しい

江別音楽協会の活動にどのような意味があるか (高校生)

	人数	割合
a. 行事への取り組みで演奏技術が上がる	22	40.7%
b. 他校の生徒と交流できる	32	59.3%
c. 他校生を見て学べる	25	46.3%
d. 他校生との情報交換	7	13.0%
e. 一般の参加者との交流	4	7.4%
f. 一般の参加者を見て学べる	3	5.6%
g. 活動が楽しい	1	1.9%
h. 自分自身が成長できる	18	33.3%
i. 学校同士が交流している	6	11.1%
j. 地域との交流ができる	5	9.3%
k. 江別全体で大きな活動ができる	10	18.5%
l. 江別の音楽のレベルが上がる	17	31.5%
m. その他	1	1.9%
(有効回答数)	54	

その他：ない

今後の江別音楽協会の活動に関する要望 (中学生)

	人数	割合
a. もっと行事を増やして欲しい	9	20.5%
b. 行事を減らして欲しい	7	15.9%
c. もっと他校生と交流したい	23	52.3%
d. もっと一般の参加者と交流したい	10	22.7%
e. 吹奏楽以外の分野と一緒にやりたい	6	13.6%
f. 吹奏楽以外の分野に取り組んでみたい	7	15.9%
g. アンサンブルコンテストの改善	5	11.4%
h. 楽器別講習会の改善	6	13.6%
i. 演奏会の改善	0	0.0%
j. シンフォニアスえべつ改善	3	6.8%
k. その他	3	6.8%
(有効回答数)	44	

- g. 全てに賞をつけた方がいい/ちょっとツライ
 h. もっと講師の先生を増やして欲しい (2)/もっとたくさんやって欲しい (2)/話ばかりしないでまず吹いて教えて欲しい/基本的なことだけでなく応用をきかせた技術も学びたい
 j. もう少し練習の回数を増やして欲しい/もっと合奏などの合同練習を増やす/毎年必ず定期演奏会をやりたい/シンフォニアスにいっぱい入って欲しい
 その他：特にありません/よくわからない

起こして次の年から使用を断られるといった状況で、互いへの思いやりやマナーがないのに音楽を高めることは出来ないだろうと当時の指導者も考えていた。

江吹研発足当時、最初の交流の契機は選抜メンバーによる合同演奏であった。選抜メンバーの合同演奏は江吹研発足と同じ平成3年に、それまで行政主導で行われていたイベント「親と子のふれあいコンサート」を継承して行われた。各学校に人数を割り振り、休日を利用して各楽器ごとに分かれた練習を開いた。違う学校の生徒が少人数で一日中一緒に練習するので、ごく自然に会話を交わすことが出来た。これが最初の直接的な交流である。

その後も演奏会や講習会で交流を深め、江吹研の活動がそれぞれの吹奏楽部のサイクルに定着していくにしたがって、つながりは当たり前のことになっていった。特に同じ楽器を担当する生徒の間では交流の機会も多く、練習の際自己紹介をさせるなどの指導者からの配慮もある。生徒同士の情報交換、手紙のやり取りもされるようになった。中学生と高校生の間の縦のつながりもでき、特に中心となっているN氏の指導する高校の生徒が、楽器の演奏の面でも練習を進める上でもリーダーシップを取っている。その姿を見て中学生は目標にしたいと考えているようである。お互いにどのような曲を練習するのかなど気に掛け、刺激を受け合って音楽の面でも向上している。音楽に対する認識が、他の学校に勝とうとする競争意識でなく、良い音楽を作りたい、楽しみたいという意識に変わったといえる。

平成11年に行ったアンケートの結果をみると、生徒が他校との交流、地域との交流に意義を見出していることがわかる。自分たちの学校だけで活動している時とは違い、活動を通して漠然とした地域への視野が生まれていると思われる。また、自分たちを日頃直接指導している顧問の指導者が、他の指導者や地域との交流によって学んでいることからくる影響も大きいのではないだろうか。

江音協への転換後、卒業生を中心とする一般バンド『シンフォニアスえべつ』も誕生した。通常の一般バンドのように独自の活動を行い、少しずつではあるが卒業生以外の一般参加者も入っている。さらに、江音協全体で行われる行事に参加し中学生・高校生をまとめる役割を担ったり、運営の補助をすることもある。ゆくゆくは、指導者と対等の立場で江音協を支えていくことが期待されているセクションである。

③ 地域との協同

江吹研発足前までは、市の文化行事も自治体主導の発表会・展示会などが主であったが、ここ10年の間に、市民全体のものを行政が支援するという体制に移行しつつある。以前は産業や住宅を整えることに精一杯であったが、今後は文化的なことに目をむけようという動きのあった自治体側と、江吹研のようにつながりが強まり、文化に対する関心の高まった市民側の要求が一致しこのような変化が生まれた。

江音協の中でも、それぞれの吹奏楽部が地域の祭りなどの行事に参加して演奏することが増えて

いる。江吹研発足以前からそのような活動を行うところもあったが、年々依頼される数も増えているということである。ここ最近の「開かれた学校」「地域と学校の連携」の流れに音楽も乗っているといえる。市内のある商店街では、毎年夏祭りにその地区の中学の吹奏楽部が出て演奏している。商店街の夏祭りの担当者によると、「聴衆の数は増えている。回も重ねると熱心なファンもいて、毎年聴きたいという。年配の人も多く、普段学校祭にも行けないような人でもここで気軽に聴ける。レベルが上がっているので熱心に聴く人が多い。始めのうちは中学生だから、というような感じで聴いていたが、真剣に聴く人が多くなった」というように、中学生のお祭りの出し物を見るという感覚ではなく純粋に音楽を聴く、楽しむ機会と意識が周辺の住民に生まれたといえるだろう。

また、ここ数年、加盟団体毎に自分たちの演奏会を行う所が増えている。平成10年度に第1回の定期演奏会を開いた学校の指導者は、「学校の体育館を利用し定期演奏会を開き、地域の人が480人くらい集まった。学校中心に隣近所のつながりが出来るという面もあるので、そのためにやれることはやる。地域の人たちにわかってもらえたらやりがいがある」と考えている。

このような小さな活動の積み重ねも、音楽を通して地域と学校とのつながりをつくるきっかけとなっている。しかし、同じ市内でも「このあたりは新興住宅街だが分譲が少ない。地元意識もなく、地域で何をやっているかも良く分からない」という地区もある。地域の連帯感、学校と地域のつながりが薄いと、演奏者が発表の機会に恵まれない上に市民も音楽を聴く機会が一つ減ってしまうことになる。地域と学校のつながりが文化を育むという側面も見逃してはならないだろう。

4 おわりに

江吹研ならびに江音協の活動では、市内の中学・高校の吹奏楽部が孤立どころか対立しそれぞれに不安を抱えていた状況をN氏の呼びかけを機に脱却し、指導者・生徒が試行錯誤・葛藤を重ねながら交流を深め、競い合うのではなく楽しむ音楽を充実させていった。そして学校間のつながりを越え、地域に根差したネットワークを志向してその輪を広げていこうとしている。この活動を支えた要素としてはN氏が人をまとめて引っ張っていく力量を発揮したことが大きいといえるが、各層の構成要員もそれぞれ学び、指導者・生徒・学校・地域の結びつきを強めていったことの持つ意味も大きい。ある指導者の「生徒と教師の成長は相乗効果。生徒と一緒に学びたい」という言葉の通り、指導者・生徒・市民というそれぞれの役割を生かしながら、また時には立場は関係なく育ち合いの関係が生まれている。

江別音楽協会の活動は、音楽という共通の目的のもとに一つの地域の中学・高校の吹奏楽部が結びつき、別の学校の指導者・生徒間の人間関係の形成、各学校の周辺の地域との連携、そして行政との連携も生んでいるネットワーク形成の過程である。また、それと同時に、集団化によって指導者や生徒・市民といった様々な立場に置かれた人が地域の課題や音楽についてともに学習し、創造

する側においては音楽の高まり・広がりやうまれ、聴く側に対しては音楽にふれあう機会・意識が生まれるよう働きかけている。江別の事例においては、この「人間関係」「音楽」という2つの成果は個々偶発的に生まれたものではなく、相互に関連し、影響を与え合いながら発展しているといえるだろう。それらのうちのどちらかを「目的」「手段」としたり、逆に「人がつながるためには芸術性を追求してはいけない」「芸術性を磨くには人のつながりは必要ない」と排除しあうのではなく、相互に高まりあっていくものだというを示唆してくれる事例といえるのではないだろうか。

[参考文献]

- 「地域住民とともに」大前哲彦・千葉悦子・鈴木敏正編著 北樹出版 1998年
第2編第2章『市民の文化創造活動と意識変容』大瀬秀樹著
- 「自己教育の主体として」山本健慈・高倉嗣昌・木村純編著
第2編第2章『文化行政と社会教育システム』大瀬秀樹著
- 「音楽教育と人間形成」ジェームス・L・マーセル著・美田節子訳 音楽之友社 1967年
- 「北海道洋楽の歩み〜ペリー来航から札幌まで」前川公美夫著 北海道新聞社 1989年
- 「北海道音楽史」前川公美夫著 大空社 1992年
- 「新ひたち風土記 音楽市民まちをつくる」佐藤克明著 財団法人科学文化情報財団芸団協出版部
1993年
- 「文化協同のネットワーク」佐藤一子編 青木書店 1992年

[参考資料]

- 「江別市の教育 昭和62年度～平成11年度」江別市教育委員会
- 「江別市統計書 1999年版」江別市企画部企画課
- 「えべつNOW 江別発経済トピックス vol.11」江別市経済部商業振興課 1999年
- 江別市インターネットホームページ (<http://www.city.ebetsu.hokkaido.jp/>)
- 毎日新聞 1998年10月23日 社説「21世紀へ 文化支援」
- 1999年11月30日 「回顧'99 クラシック」